

日本のシリコンバレーも夢ではない

本田技研工業株式会社 代表取締役社長

伊東 孝紳さん

Takanobu Ito



経歴

静岡県清水区生まれ。京都大学大学院工学研究科修了、1978年、本田技研工業株式会社入社、97年、株式会社本田技術研究所取締役、2000年、本田技研工業取締役、03年、常務取締役・モータースポーツ担当、同年、本田技術研究所取締役社長、05年、常務取締役・生産本部鈴鹿製作所長、07年、同・四輪事業本部長、同年、専務取締役、09年、代表取締役社長に就任。この間、98年から2年間に、ホンダオールランドデアメリカズ・インコーポレーテッド副社長として米国に駐在。60歳。
http://www.honda.co.jp

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

F1復帰を実現

ユニークな発想、めげない、やんちゃでチャレンジャー、そしてエネルギーシユだ。伝説のスポーツカーといわれた初代「NSX」（1990年発売）のボディ設計を担当し、世界初のオールアルミボディ車を開発、世間をあっと驚かせた。「社内は一部トップを除いて上司全員反対。アルミというと、終戦後、アルミ弁当箱が梅干しで溶けたことを思い出す、とまで言われました」と当時

を振り返り苦笑する。

リーマン・ショックで先が見えない厳しい状況下の2009年に社長に就任した。「事業計画の見直しを相急いでやりました。一番念頭に置いたのは、市場でいうと米国、生産でいうと日本中心の構図を変えていかなければいけないと判断。様々な施策、方向性を一気に変えました」。

昨年5月、フォーミュラワン（F1）復帰を発表した。「企業の存在価値はアイデンティティ。もう一度、われわれのアイデン

ティティを強く認識するべきではないかと。F1はホンダが掲げる柱の一つ、チャレンジの象徴でもあるわけです」と伊東さん。

これからの会社運営では、▽真のグローバル化をテーマに、会社を引っ張っていく▽ハイブリッドシステム技術でリードしたいと決意を語る。

人を寄せ付ける「雰囲気」を

政治とは縁遠い伊東さんに敢えて、世界のホンダ社長の経験を踏まえ、「もし静岡市長なら、何をしたいですか」との質問をぶつけると、即座に「シリコンバレーでしょつね。仕事の関係でたびたび行きますが環境がいい。風光明媚で世界的な大学もある」。

「先進的なトライをする、世界に門戸を開いた大学を誘致しているんな知恵を集めたい。知恵と情報のハブですよね。これに住めるという要素を集めれば第二のシリコンバレーになれると思う。静岡というロケーションはそれができる環境にある」。

観光政策については、「今は単なる観光では満足しないのではないかと指摘。その地域全体の雰囲気が好きだということから人が集まるのだと思う。例えば、城下町なら電柱の地下化など城下町らしさを醸し出す、人を寄せ付ける雰囲気づくりをすることが必要ではないでしょうか」。

趣味はバイクでCB1100を愛用。「ものすごく快適です」と目を細めた。

（文・写真：長田義明）